

4.2 連続関数

命題 4.3. I を任意の集合, X_i ($i \in I$) を半順序集合 D の部分集合として, 各 $i \in I$ について, $a_i = \sqcup X_i$ が存在したとする. また, $X = \cup\{x_i | i \in I\}$ とおく. このとき, $a = \sqcup\{a_i | i \in I\}$ が存在すれば, $a = \sqcup X$ が成り立つ. 逆に, $b = \sqcup X$ が存在すれば, $b = \sqcup\{a_i | i \in I\}$ が成り立つ.

証明 : 命題 4.2 を使う. $a = \sqcup\{a_i | i \in I\}$ が存在すれば, 任意の $c \in D$ について,

$$\begin{aligned} a \sqsubseteq c &\Leftrightarrow \forall i \in I. a_i \sqsubseteq c \\ &\Leftrightarrow \forall i \in I. X_i \sqsubseteq c \\ &\Leftrightarrow X \sqsubseteq c \end{aligned}$$

したがって, $a = \sqcup X$ が成り立つ. また, $b = \sqcup X$ が存在すれば, 任意の $c \in D$ について,

$$\begin{aligned} b \sqsubseteq c &\Leftrightarrow X \sqsubseteq c \\ &\Leftrightarrow \forall i \in I. X_i \sqsubseteq c \\ &\Leftrightarrow \forall i \in I. a_i \sqsubseteq c \end{aligned}$$

したがって, $b = \sqcup\{a_i | i \in I\}$

cpo 上でプログラムを意味付けする.

- プログラム \Rightarrow 領域 D から領域 D' への関数
- プログラムは D から D' への任意の関数を表すことができるか?
- プログラムを D から D' への関数 f とし, $a, b \in D$ とすると,

$$a \sqsubseteq b \Rightarrow f(a) \sqsubseteq f(b)$$

が成り立つべき.

定義 4.8. D と D' を半順序集合として, 関数 $f : D \rightarrow D'$ について,

$$\forall a \in D \forall D. a \sqsubseteq b \Rightarrow f(a) \sqsubseteq f(b)$$

が成り立つとき, f を **単調関数** (monotone function) と呼ぶ.

- プログラムが表す関数は単調である.

- データ a_0, a_1, a_2, \dots が次を満たすなら,

$$a_0 \sqsubseteq a_1 \sqsubseteq a_2 \sqsubseteq \dots$$

f が単調関数である場合, 次を満たす.

$$f(a_0) \sqsubseteq f(a_1) \sqsubseteq f(a_2) \sqsubseteq \dots$$

ここで, f が次を満たすとする,

$$f(\sqcup\{a_i | i = 0, 1, 2, \dots\}) = \sqcup\{f(a_i) | i = 0, 1, 2, \dots\}$$

f は, 連続関数と呼ばれる.

定義 4.9. D と D' を cpo として, 関数 $f : D \rightarrow D'$ が連続 (continuous) であるとは, 任意の有向集合 $X \subseteq D$ について, $\{f(x) | x \in X\}$ の上限が存在して,

$$f(\sqcup X) = \sqcup\{f(x) | x \in X\}$$

が成り立つことである.

- cpo 上の連続関数は常に単調: $a \sqsubseteq b$ ならば, $\{a, b\}$ は有向集合である. f を連続であるとする,

$$f(a) \sqsubseteq f(a) \sqcup f(b) = f(a \sqcup b) = f(b)$$

である.

注 : 逆は成り立たない.

例: 実数上の閉区間 $[0, 1] = \{x \in \mathbf{R} \mid 0 \leq x \leq 1\}$ は, \leq について cpo を成す. 関数 $f: [0, 1] \rightarrow [0, 1]$ を

$$f(x) = \begin{cases} 0 & (0 \leq x < 1) \\ 1 & (x = 1) \end{cases}$$

とすると, 1 に収束する元の列

$$a_0 \leq a_1 \leq a_2 \leq \cdots < 1$$

について, $A = \{a_0, a_1, a_2, \dots\}$ は有向集合で $\sqcup A = 1$. すなわち,

$$f(\sqcup A) = 1$$

しかし,

$$\sqcup \{f(a_i) \mid i = 0, 1, 2, \dots\} = 0$$

したがって, f は連続でない.

命題 4.4. 狭義の無限上昇列を次のように定義するとき,

$$a_0 \sqsubseteq a_1 \sqsubseteq a_2 \sqsubseteq \cdots \text{ で } a_i \neq a_{i+1} (i = 0, 1, 2, \dots)$$

狭義の無限上昇列を含まない D, D' を cpo として, すべての単調関数 $f: D \rightarrow D'$ は連続である.

証明 : D の任意の有向部分集合 X について, $\sqcup X \in X$ が言えれば十分.

$\sqcup X \in X$ を仮定してみると, f は単調なので, 任意の $x \in X$ について, $f(x) \sqsubseteq f(\sqcup X)$ であり, 仮定から, $f(\sqcup X) \sqsubseteq \sqcup \{f(x) \mid x \in X\}$. したがって, $f(\sqcup X) = \sqcup \{f(x) \mid x \in X\}$ が成り立ち, f は連続となる. $\sqcup X \in X$ を次の背理法によって示

す. $\sqcup X \notin X$ と仮定すると, 任意の元を 1 つ選んで $a_0 \in X$ とする. $a_n \in X$ が定義されていると仮定して, a_{n+1} を定義する. $a_n \sqsubseteq \sqcup X \notin X$ なので, a_n は X の最大元ではない. したがって, $b \not\sqsubseteq a_n$ である b が存在して, $\{b, a_n\}$ の上界 $c \in X$ が存在する. この c を a_{n+1} と定義すると, $a_n \sqsubseteq a_{n+1}$ で $a_n \neq a_{n+1}$. したがって, X は狭義の無限上昇列を含む. これは仮定に反する. ■

定理 4.1. (cpo 上の連続関数は, また cpo を成す)

D と D' を cpo としたとき, D から D' への連続関数全体を $[D \rightarrow D']$ と表し, 次の半順序を導入する.

$$f \sqsubseteq g \Leftrightarrow \forall x \in D. f(x) \sqsubseteq g(x)$$

このとき, $[D \rightarrow D']$ は cpo となる. 特に, $[D \rightarrow D']$ の有向部分集合 F の上限 $\sqcup F$ は,

$$(\sqcup F)(x) = \sqcup \{f(x) \mid f \in F\}$$

証明 : D から D' への関数 f_\perp を

$$f_\perp(x) = \perp$$

と定義すると, f_\perp は $[D \rightarrow D']$ の最小限. F を $[D \rightarrow D']$ の有向部分集合とすると, 各 $x \in D$ について $\{f(x) \mid f \in F\}$ は D' の有向部分集合であり, 上限が存在する. そこで, 関数 $g: D \rightarrow D'$ を

$$g(x) = \sqcup \{f(x) \mid f \in F\}$$

と定義すると、 g が F の上限であることは、次ように示せる。任意の有向集合 $X \subseteq D$ について、

$$\begin{aligned}
 g(\sqcup X) &= \sqcup \{f(\sqcup X) \mid f \in F\} \\
 &\sqcup \{\sqcup \{f(x) \mid x \in X\} \mid f \in F\} \quad f \text{ は連続} \\
 &\sqcup \{f(x) \mid x \in X \text{ かつ } f \in F\} \quad \text{命題 4.3} \\
 &= \sqcup \{\sqcup \{f(x) \mid f \in F\} \mid x \in X\} \\
 &= \sqcup \{g(x) \mid x \in X\}
 \end{aligned}$$

したがって、 g は連続である。さらに、任意の $h \in [D \rightarrow D']$ について、

$$\begin{aligned}
 g \sqsubseteq h &\Leftrightarrow \forall d \in D. g(d) \sqsubseteq h(d) \\
 &\Leftrightarrow \forall d \in D. (\sqcup \{f(d) \mid f \in F\}) \sqsubseteq h(d) \\
 &\Leftrightarrow \forall d \in D \forall f \in F. f(d) \sqsubseteq h(d) \quad \text{命題 4.2} \\
 &\Leftrightarrow \forall f \in F. f \sqsubseteq h
 \end{aligned}$$

したがって、命題 4.2 から、 g は F の上限。

4.3 不動点意味論

再帰的に定義された関数をどう扱うか.

$$\text{fact}(x) = \text{if } x = 0 \text{ then } 1 \text{ else } x * \text{fact}(x - 1)$$

の階乗を求める関数を基に, $\Phi_{\text{fact}} : [\mathbf{N} \rightarrow \mathbf{N}] \rightarrow [\mathbf{N} \rightarrow \mathbf{N}]$ を,

$$\Phi_{\text{fact}}(f)(x) = \text{if } x = 0 \text{ then } 1 \text{ else } x * f(x - 1)$$

と定義する. 定義中に用いられている部分関数 $f(x_1, \dots, x_n)$ は, どれか 1 つの引数が未定義になれば, 式全体が未定義になるものとする. **if-then-else** は,

$$\text{if } L \text{ then } M \text{ else } N = \begin{cases} M & (L \text{ が真}) \\ N & (L \text{ が偽}) \\ \text{undef} & (L \text{ が未定義}) \end{cases}$$

と定義する.

注 1 : $[\mathbf{N} \rightarrow \mathbf{N}]$ の最小元は, いたるところが未定義の部分関数で \emptyset

注 2 : 関数 $f^n : X \rightarrow X$ を

$$f^n(x) = f(f(\dots(f(x))\dots))$$

と定義.

$\Phi_{\text{fact}}^n(\emptyset)$ は次の部分関数 :

$$\begin{aligned} \Phi_{\text{fact}}^0(\emptyset)(x) &= \text{undef} \\ \Phi_{\text{fact}}^1(\emptyset)(x) &= \begin{cases} 1 & (x = 0) \\ \text{undef} & (x \geq 1) \end{cases} \\ \Phi_{\text{fact}}^2(\emptyset)(x) &= \begin{cases} 1 & (x = 0) \\ 1 & (x = 1) \\ \text{undef} & (x \geq 2) \end{cases} \\ \Phi_{\text{fact}}^3(\emptyset)(x) &= \begin{cases} 1 & (x = 0) \\ 1 & (x = 1) \\ 2 & (x = 2) \\ \text{undef} & (x \geq 3) \end{cases} \\ \vdots \\ \Phi_{\text{fact}}^n(\emptyset)(x) &= \begin{cases} x! & (0 \leq x < n) \\ \text{undef} & (x \geq n) \end{cases} \end{aligned}$$

$\Phi_{\text{fact}}^n(\emptyset)$ は, fact の再帰呼出しを途中まで展開した fact_n と一致.

$$\Phi_{\text{fact}}^* = \sqcup \{ \Phi_{\text{fact}}^n(\emptyset) \mid n \in \mathbf{N} \}$$

は, 再帰的定義に関する次の等式を満たす.

$$\Phi_{\text{fact}}(\Phi_{\text{fact}}^*) = \Phi_{\text{fact}}^*$$

- 一般に, cpo 上の連続関数 f は不動点をもつことが証明できる.

定理 4.2. (最小不動点定理)

D を cpo, f を D から D への連続関数とすると, $a \in D$ が存在して次の 2 つの条件が成り立つ.

1. $f(a) = a$,
2. $f(b) = b$ ならば $a \sqsubseteq b$

すなわち, a は f の最小不動点である. 特に,

$$a = \sqcup \{ f^n(\perp) \mid n \in \mathbf{N} \}$$

証明 : D は cpo なので, 最小限 $\perp \in D$ が存在する. また, f は単調なので,

$$\perp \sqsubseteq f(\perp) \sqsubseteq f^2(\perp) \sqsubseteq \dots$$

したがって,

$$A = \{f^n(\perp) | n = 0, 1, 2, \dots\}$$

は, 有向集合であり, 上限 $\sqcup A$ が存在する. $\sqcup A$ は, f の不動点であることを示す.

$$\begin{aligned} f(\sqcup A) &= f(\sqcup \{f^n(\perp) | n = 0, 1, 2, \dots\}) \\ &= \sqcup \{f(f^n(\perp)) | n = 0, 1, 2, \dots\} \quad f \text{ の連続性} \\ &= \sqcup \{f^{n+1}(\perp) | n = 0, 1, 2, \dots\} \\ &= \sqcup A \end{aligned}$$

また, $b \in D$ を f の任意の不動点, すなわち $f(b) = b$ とすると, $\perp \sqsubseteq b$ なので, 各 $n \geq 0$ について, $f^n(\perp) \sqsubseteq f^n(b) = b$.
したがって, $\sqcup A \sqsubseteq b$. ■